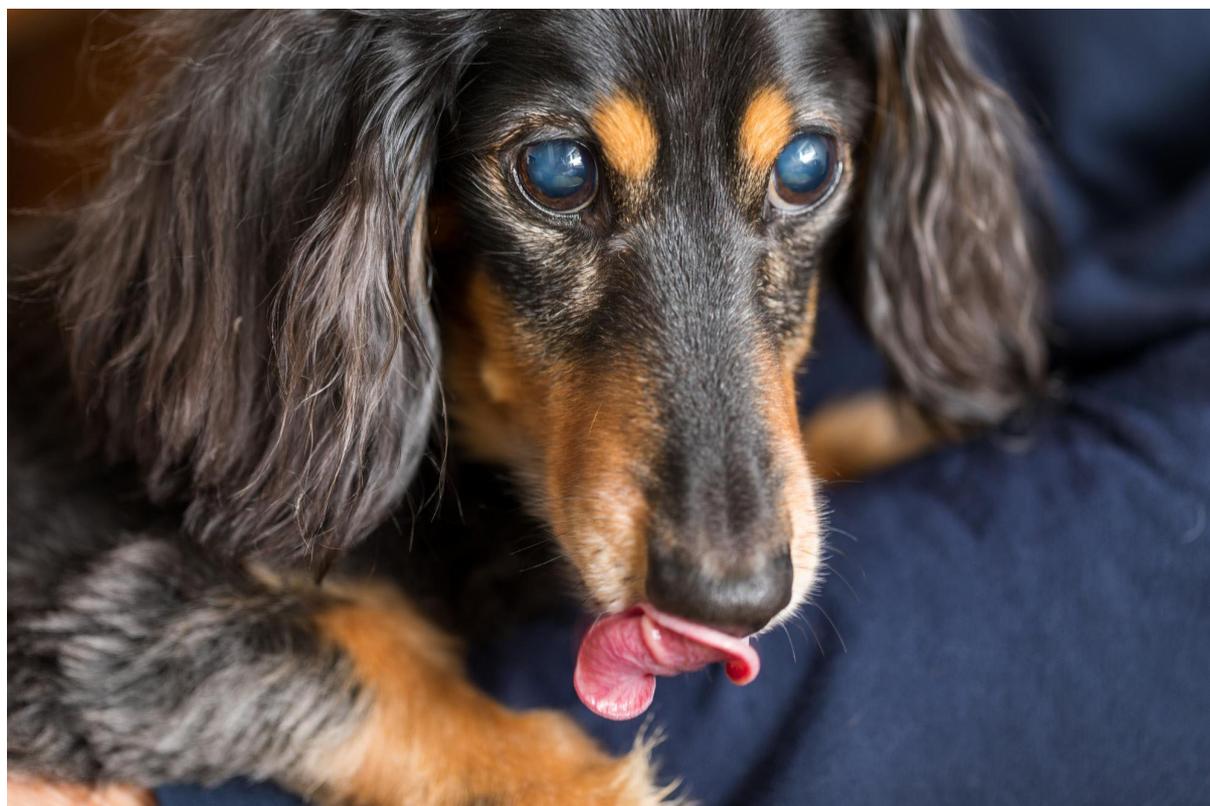


犬の白内障手術はすべきか？手術方法やリスクについて

犬の白内障手術をすべきかどうか悩んでいる方も多いのではないのでしょうか。犬の白内障は、人と同じように水晶体が白く濁ることで目が見えなくなる病気であり、根本的な治療方法は手術しかありません。この記事では、当院の白内障手術方法や手術をしないリスク、手術の必要性などを解説しているので、参考にしてみてください。

犬の白内障手術はすべきか？



出典：PIXTA

白内障は“老犬になったらなる病気”とイメージする方が多いと思います。しかし、犬の白内障の原因はさまざま、その中でも若年性の白内障は一般的に進行が早いと言われています。

犬の白内障は、人と同じように水晶体が白く濁ることで目が見えなくなる病気であり、根本的な治療方法は手術しかありません。しかし、必ず手術が必要というわけではありませんので、適切な診断の上、治療方法についてご相談させていただきます。

白内障の手術をしないとどうなるのか？

白内障は、成熟白内障から過熟白内障へ進行するにつれて、ぶどう膜炎がみられ、さらに緑内障や網膜剥離などを引き起こします。それによって、犬に不快感や痛みを生じてしまうのです。

その段階から白内障手術をしようとしても、合併症も多くなかなか難しくなってしまいます。そうなる前に手術の適期を見極め、対処していくことが重要です。

確かに、高齢で麻酔のリスクが高い症例や、経過が長いことで水晶体が非常に硬く難渋する症例もあり、リスクに見合った効果が得られるのかを慎重に判断しなければなりません。

手術をするリスク、手術をしないリスクをご説明させていただいた上で、どのように治療をしていくのか相談していく必要があります。

白内障手術について

当院では、2018年より眼科用手術顕微鏡（Zeiss OPMI VISU 160）、超音波乳化吸引装置（Abbott compact intuitiv）を導入し、白内障手術を行っております。

一般的に犬の白内障手術は、人と比べても炎症が起こりやすく合併症が多いと言われております。適切な診断のもと手術適応を見極め、術後管理を注意して行う必要があります。



手術方法

基本的な手術方法は、人の白内障手術と同様です。角膜輪部を3~4mm切開し、眼内にアプローチします。水晶体前嚢を円形に切開後、超音波乳管吸引装置を用いて水晶体核を除去し、人工レンズを挿入します。

手術適応

白内障には、主に初発期・未熟期・成熟期・過熟期の4段階のステージに分類されています。白内障の手術は、未熟期から成熟期が適しています。

また、糖尿病性白内障や若年性白内障でも手術は可能です。糖尿病性白内障は、全身麻酔の影響がないように糖尿病が適切にコントロールされている必要があります。

若年性白内障は非常に進行が早いので、適切に手術のタイミングを見極めなければなりません。反対に手術適応が難しいケースは、炎症を強く起こして虹彩の癒着なども生じているような白内障や、網膜剥離も伴って視力回復が難しい症例、全身麻酔のリスクが非常に高い症例が挙げられます。

その他に、白内障は手術後も検査や点眼を続けることが必要です。犬の性格上、検査や点眼がどうしてもできない場合は適応が難しくなります。

目薬で白内障は治る？白内障点眼について



出典：[PIXTA](#)

目薬で白内障が治ると思って長期間使用されている飼い主様に遭遇することがあります。ピレノキシンやグルタチオンのような点眼や、ネット上でもさまざまな点眼やサプリメントが販売されています。

現時点で白内障が治るような薬はありませんので、飼い主様には正しい情報のもとで使用していただきたいと思います。

私自身は“「気休め」や「おまじない」程度の効果のつもりで使用してください”とお話ししており、敢えて勧めることはありません。人の白内障と同様に、犬の白内障の治療には手術しかありませんので、正しく理解していただくことが必要かと思えます。

犬の白内障手術をすべきか迷ったら当院に相談

「もうこの子も老犬ですからね。」という理由で様子を見られてないでしょうか。白内障は単に水晶体が白くなって目が見えなくなる病気ではありません。放っておくとぶどう膜炎や緑内障や網膜剥離などの合併症を引き起こすリスクがあり、それによって動物が不快感や痛みを感じてしまいます。

また、合併症が生じてから手術を進めようとしても、手術が難しい場合があるので注意が必要です。そうなる前に適切な検査の実施、手術適応・手術の適期を見極めて対処していかなければなりません。

白内障手術後に、「目が見えるようになって以前のように楽しそうに散歩に行くようになりました。」と飼い主様より嬉しいお声をいただくと、やってよかったと思えます。まずは相談や診察からでも構いませんので、ご興味を持った方はぜひ一度当院にご相談ください。